

事業の名称

湯苺生産加工促進事業

〔事業責任者〕

(自治体側)

阿見町生活産業部商工観光課長 鹿志村浩行

(大学側)

農学部附属フィールドサイエンス教育研究センター 准教授 佐藤 達雄

事業テーマ：自治体との連携

連携先

阿見町商工会

プロジェクト参加者

佐藤 達雄 (農学部附属フィールドサイエンス教育研究センター 准教授)

担当：イチゴ用温湯散布装置「ゆけむらー」を使用して栽培した「湯苺(商標登録)」の阿見町商工への提供、湯苺の生産に関する技術移転。

嶋田 春菜 (農学部4年生)

担当：マスコットキャラクター「湯苺あみ」を使った広報宣伝、「湯苺」の栽培、加工への参加と、試作した製品のアンケート調査)

鹿志村浩行 (阿見町生活産業部商工観光課)

担当：阿見町商工会が毎年開催する「湯苺のスイーツフェア」の支援、農業体験を取り入れたツアーの企画、誘致)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

茨城大学では、イチゴの栽培における農薬使用量の削減を目的として平成19年から22年にかけて茨城大学で実施した研究でイチゴ用温湯散布装置「ゆけむらー」を開発した。また、この栽培方法で生産された苺に対して使用する名称「湯苺」を商標登録した。その研究成果が関心を引くとともに「湯苺」PRのために製作したマスコットキャ

クターが評判になったため、これらを阿見町内に導入し、湯苺の生産体制を確立することによって農業振興、産業振興を図ることとする。これにより、阿見町商工会が行う「湯苺のスイーツフェア」の参加店舗に対する材料供給の円滑化を図るとともに、地域資源として湯苺を普及・PRする。最終的には「湯苺」の栽培を通じた農業振興、「湯苺」を使用した食品の開発、販売による産業振興により町の活性化を図る。

②連携の方法及び具体的な活動計画

茨城大学は、学内のビニールハウスで「ゆけむらー」を用いて「湯苺」を栽培し、その技術移転のためのPRを行うとともにマスコットキャラクター「湯苺あみ」を使った「湯苺」の広報宣伝を行う。阿見町は、阿見町商工会が毎年開催する「湯苺のスイーツフェア」における商工会加盟店舗での商品開発、販売を支援するとともに、よいとこプラン、アウトレット発着ミニツアーなど農業体験を取り入れたツアーを企画、誘致する。また、町内で行われる各種イベントに出展し、湯苺のPRやアンケート調査を行う。なお、両者の連携は、共同研究契約に基づいて行う。

③期待される成果

茨城大学としては、これまでの研究で開発された温湯散布装置を使用してイチゴの栽培を行うことにより研究成果の実証、展示ならびにそれらによる成果広報や技術移転、研究費獲得が可能となる。阿見町にとっては、茨城大学が商標権を持つ

「湯莓」の供給を受けて阿見町商工会加盟の食品製造業者が新商品開発、販売を行い、これによって町内の産業の振興が図られる。また、今後、「湯莓」の生産を町内の農家で行うことにより町内の農業振興が図られる。さらにこれらの取り組みが町内に周知されるとともに県外にも広報され、茨城大学と阿見町との間で行われる地域連携活動の取り組みの一つとして町内外に広く認知される。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

1) 「湯莓」の生産

茨城大学附属フィールドサイエンス教育研究センターのビニールハウス（540m²）内において、5月25日に平成25年度生産のイチゴを利用して「阿見町体験ツアー」を受け入れ、約40名の参加

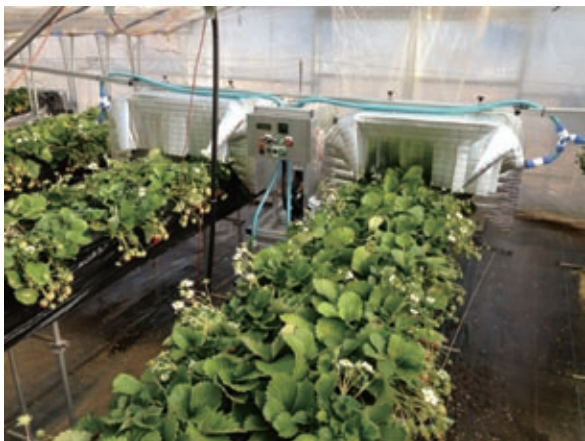


図1 温湯散布装置



図2 イチゴの栽培状況

者に対して見学と収穫体験を行った。また、育成したイチゴの苗を9月12日に定植し、温湯散布装置を用いてイチゴを栽培した。12月2日より収穫をスタートし、1月から3月末日まで阿見町商工会への収穫果の提供を行った（図1, 2, 3）。

2) 「湯莓」使用製品の試作、販売

平成25年度産の「湯莓」で製造したイチゴピューレならびに平成26年度産「湯莓」果実を用いた製品試作を阿見町内12業者が行った。最初に10月27日に阿見町で開催された「あみさわやかフェア」においてアンケート調査を企画したが台風による悪天候で中止になった。次に12月15日にあみプレミアムアウトレットにて開催された「2013冬のまい・あみ・マルシェ」において湯莓のPR及びアンケート調査を行った（図4, 5）。2月21日には「湯莓のスウィーツフェア」をスタートし、3月末日まで各店舗で「湯莓」を使用した製品を試作、販売した（図6, 7, 8）。さらに3月9日には「あみ商工2014春まつり」において各店舗が持ち寄った製品を販売・PRを行った。また、予科練平和記念館を拠点に移動販売車による製品販売を開始し、現在も継続中である。

3) その他の広報活動

その他、オープンキャンパスや大学祭での見学や日本畜産学会での出展、試食協力などの活動を行った。



図3 収穫された「湯莓」



図4 2013冬のまい・あみ・マルシェ



図8 湯苺のスイーツフェア実施状況



図5 「湯苺」PR用試作品



図9 あみ商工2014春まつり



図6 「湯苺」試作品のアンケート調査



図10 移動販売車「あみカフェ」



図7 湯苺のスイーツフェア（取材の様子）

②プロジェクトの達成状況

今年度の取り組みは新聞各紙や YouTube における動画ニュースでたびたび取り上げられ、町内外にその知名度は広く浸透した。このため茨城大学の研究や阿見町との地域連携活動の PR としては十分な効果が上がったものと考えられる。また、各店舗の販売状況も概ね好調であり、産業振興にも役だった。一方、学内での生産も経費的、労力的にみて限界であることから、次年度以降は町内で湯莓の生産を引き受ける農家を確保するこ

とが必要である。現時点では引き受け手の目処が立っていないため、今後、至急、この問題の解決に向けて取り組む必要がある。

③今後の計画と課題

前記のように町内で湯莓の生産を引き受ける農家を確保することが急務となっている。この問題が解決できれば今年度同様の販売を行うことで、地域振興策の一つとして非常に有用と判断される。